

# 途上国の障害女性や障害児のくらしの現場を訪ねる

—フィリピン・ヴィサヤ地方における家計調査から—

写真・文 森 壮也  
Soya Mori



①都市部のスキャッター地域にもポリオ障害者、調査員は片腕切断者

## ●障害者を開発のプレイヤーに取り込むためのSDGs

二〇一五年九月、ニューヨークの国連本部で開催された「国連持続可能な開発サミット」において、一五〇超の加盟国首脳により成果文書として「我々の世界を変革する…持続可能な開発のための二〇三〇アジェンダ」（通称、SDGs）が採択された。二〇一五年までのミレニアム開発目標（MDGs）を引き継ぐ、次の一五年間の世界共通の開発目標である。この一七の目標には表面的にはみえていないが、MDGsで漏れていた障害者も、脆弱な人たちのなかに移民、先住民、子供、青年等と並んでターゲットの形で明記された。つまり、障害者のインクルージョンへの留意が開発目標達成の際に必要なことなのである。

## ●障害統計・生計調査の先行事例作り

JETROアジア経済研究所では、二〇〇〇年代の初めから、早くも「障害と開発」というテーマに取り組み始め、その過程で、多くの開発途上国で障害統計未整備という問題があることに注目してきた。国連統計局や世界銀行などを中心とした「障害統計に関する国連ワシントングループ」（The Washington Group on Disability Statistics：WG）が、国際比較が可能、かつ実行可能なセンサスにおける障害に関する質問事項について、合意を巡る議論が続いている。MDGsやSDGsの達成のためには、(1) 障害比率だけでなく、(2) 彼らの貧困状況の統計的な把握、(3) 政策に反映可能なエVIDランスに基づいた、これら三つの研究の蓄積が必須であ



④ろう調査員とフィリピン手話通訳は協働で調査することも



③知的障害者の姉と母親の生活をデパートで働く妹が支える(都市部)



②調査にはタブレットを用い、盲調査員も読み上げ機能で内容を把握



⑦都市部海沿いのスクォッター地区の屋外に住む脳性マヒ者



⑥同じ家に住む家族全員がろう者という一家(都市部)



⑤ろうの調査員がろう女性の生活実態をフィリピン手話で尋ねる

### ●フィリピン南部における調査

一方、フィリピンの地方部、特に南部においては、伝統的な社会が色濃く残っており、女性に対するネガティブな態度も強いと考えられている。その事実を踏まえ、障害女性の状況は、フィリピン南部では北部とどのように異なっているのか、社会的な要因は障害女性の生計や教育にどのように影響しているのかを確認しようと、アジア経済研究所は、再び、前回同様、フィリピン

### ●ジェンダー平等の国でも取り残されている障害女性

そうした問題意識から、二〇〇八年にマニラ首都圏で障害者生計調査を行った。また二〇一〇年には東京大学経済学部松井彰彦研究室のREADプロジェクトの支援を得て、ルソン島の農村部で障害者生計調査を行い、その成果を日本語と英語で発表してきている(参考文献①、②、③、④)。

そうした調査を通じて明らかになったのは、障害女性が障害男性に比べても、社会的に大変に不利な状況におかれているという事実であった。フィリピンは、アジアのなかでもジェンダー平等度では日本を遙かに上回る平等度を達成している国である。そのような国にあっても障害女性となると、非障害女性と同様の平等度が達成されていないどころか、むしろ悪い状況にあるというのは、大きな驚きであった(参考文献⑤)。

フィリピン南部においては、伝統的な社会が色濃く残っており、女性に対するネガティブな態度も強いと考えられている。その事実を踏まえ、障害女性の状況は、フィリピン南部では北部とどのように異なっているのか、社会的な要因は障害女性の生計や教育にどのように影響しているのかを確認しようと、アジア経済研究所は、再び、前回同様、フィリピン



⑨農村部での調査で活躍してくれた隻眼のすぐれた調査員



⑩障害者の住所は正確には把握されておらず、近所で尋ねて回らないと住まいも見つからない。人がまばらに住む農村部では大変なことになる

ンの開発研究所（PIDS）と合同調査を二〇一六年六～七月に行った。また地方部では障害を持つ子どもの教育ファシリティが整っていないことも指摘されており（参考文献⑥）、障害児を抱える家計の置かれている状況についても調査を行った。

●障害当事者調査員

具体的にはフィリピン南部ビサヤ地方のセブ島の北部の農村部と中心にある都市部の二カ所で調査が行われた。ルソン島での調査同様、地元の障害当事者に調査員として参加してもらい、彼らにトレーニングを行ったうえで地元自治体が把握している障害女性と障害児のいる家計を訪問調査したものである。障害種別では、ルソン島での調査では、視覚障害、聴覚障害、肢体不自由の三障害のみであったが、今回は、視覚聴覚、肢体の障害当事者調査員に知的障害と精神障害のいる家計の訪問もしてもらった。

●マニラや北部ルソン島との違い

調査地では言語もマニラ首都圏とは異なるセブアノが用いられている。セブ市周辺など近年、急激な発展をみせている地域もある一方で、都市部ではスクオッター地区のような貧困地域に障害者が多数みられる。その他にも農村部では障害児教育の場も自治体内で一方所しかないなど障害者のためのファシリティもほとんどないといった貧困と停滞の中で生きざるを得ない状況も多くみられた。現在、得られたデータをもとにルソン島との比較、また同地域の非障害者との比較といった二つの側面からの比較分析を



⑪家族の家の裏庭の掘っ立て小屋には精神障害者が住んでいた（農村部）



⑩小学校に1年しか通えなかった識字のないろう女性も（農村部で）



⑬農村部でただ1つのろう児のクラス。教員もろう者。こどもの年齢はまちまち



⑫知的障害の少年。家族の手厚いケアの中にあることがインタビューを通して伝わってくる（農村部）

行っている。

《注》

(1) 障害当事者のみでなく、ソーシャル・ワーカー等の関係者も今回の調査には調査員として加わった。

《参考文献》

- ① 森壮也編『途上国障害者の貧困削減——かれらはどう生計を営んでいるのか——』岩波書店 二〇一〇年。
- ② 森壮也・山形辰史『開発経済学の挑戦Ⅳ 障害と開発の実証分析——社会モデルの観点から——』勁草書房、二〇一三年。
- ③ Mori, Soya, Celia M. Reyes, and Tatsufumi Yamagata, eds., *Poverty Reduction of the Disabled Livelihood of Persons with Disabilities in the Philippines*, Routledge, 2014.
- ④ Albert, Jose Ramon, Soya Mori, Celia Reyes, Aubrey D. Tabuga, and Tatsufumi Yamagata, "Income Disparity among Persons with Disabilities, Assessed by Education and Sex: Accentuated Gender Difference Found in Metro Manila, the Philippines," *The Developing Economies*, Volume 53, Issue 4, 2015, pp.289-302.
- ⑤ 森壮也「フィリピンにおける「ジェンダーと障害」 小林昌之編『アジア諸国の女性障害者と複合差別——人権確立の観点から——』アジア経済研究所（近刊）。
- ⑥ ——「フィリピンにおける障害者教育法」小林昌之編『アジアの障害者教育法制——インクルーシブ教育実現の課題——』アジア経済研究所、二〇一五年、一一一—一四四ページ。



もり そうや／アジア経済研究所 開発研究センター

「障害と開発」に2000年代から取り組む自らも聴覚障害当事者の開発研究者。フィールドはフィリピン、インド、ケニアなどで、日本手話、アメリカ手話のほか、フィリピン手話等、フィールドの手話も使います。

⑭ 農村部での調査は、椰子の木の下でも。中途失明者への調査



⑮ セブ島北部での調査の調査チーム全員集合